

富山県富山市立堀川小学校 第88回教育研究実践発表会 参加報告  
 ～個が育つ教育経営 個の学びと教育～

1 研修のねらい

○次期指導要領で求められる「主体的・対話的で深い学び」について、堀川小では長い歴史の中で「聞き合う」中で個が学ぶ研究を進めてきている。くらしづくりにはたらく教育活動、4本の柱(朝活動、くらしの時間、授業、自主活動)がどのように実践されているのかを学び、湖東小における本年度の研究テーマである「本物の言葉で語る子ども」の授業の実現に向けての手がかりを探る。



2 参加期日と概要

平成29年6月3日(土)2日目

|    |      |     |        |       |       |      |        |      |    |              |       |
|----|------|-----|--------|-------|-------|------|--------|------|----|--------------|-------|
| 受付 | 児童登校 | 朝活動 | くらしの時間 | 一限の授業 | 二限の授業 | 児童下校 | くらしの時間 | 研究協議 | 昼食 | 講演<br>志水宏吉先生 | 閉会の挨拶 |
|----|------|-----|--------|-------|-------|------|--------|------|----|--------------|-------|

3 研究の概要(研究紀要より抜粋)

授業研究のねらい

昭和34年3月から一貫して「学習指導方法の模索ではなく、子ども一人ひとりの見方・考え方・感じ方・行い方の特性を捉え、一人ひとりの子どもの学びを生かす授業実践を目指すこと。(子ども観、授業観、指導観)

「個の学び」について

子ども一人ひとりが、人間としての自らの見方・考え方・感じ方・行い方を育てる」ために追究していく事であると考え。追究とは、自らの生き方を深めていく過程であり、自問自答のはたらきである。

子どもは、自己を見つめ、自己をつくり替えていこうとする課程の中で、自分の内にいる第二の自己と語り合うのである。すなわち子どもは、自分をめぐる自然、文化、社会あるいは、人、もの、出来事と心をつなぎ、自らの見方・考え方・行い方を自分自身の経験や仲間との聞き合い等を通して再構成していく過程において、自らの「生き方を深めていく」と考える。

「個の学びと教育」について

教師が、子どもの考えの根拠や背景、考え方の傾向を捉えようと解釈を加える場面は、主に授業の中における子どもの言動である。しかし、授業の中において子どもが思考をはたらかせ、その子どもながらの考えを構築していく際には、授業時間以外のその子の生活経験や学習経験が大きく影響している。

主体的で対話的な学習を支える2つの学習法

「ひとり学習」(主体的な学びを目指して)

子どもが独りで個別的に取り組む学習形態を意味するのではなく、「自立した一人の取組」を意味し、相互作用の場としての集団課程において、自分をみつめ、み直す一連の過程も含めて「ひとり学習」という。

「聞き合い」(対話的な学びを目指して)

話し合いは「聞き合い」であり、聞き合いは、本質的には「求め合い」である。他に求めるとは聞こうとすることであり、自己を直視することであり、他に求めようとするとき、自分の中に第二の自己が芽生えるのである。つまり、自分の中に既にもっていた見方・考え方・感じ方・行い方と、他から得たもう一つの見方・考え方・感じ方・行い方が、自己の中に同居することで、はじめからの自己と第二の自己とが葛藤を引き起こす。

生き方としての深まりは、こうした自己へのみ返しによって可能となるのである。そのためにも、集団課程の成果を一人ひとりの子どもの側から確かめることが大切となる。集団課程によってどんな内的葛藤を起こしたのか、どんな道筋で解決しようとしたのか、何を育て、何を得たのかということについて、一人ひとりの子どもに即して見届けていくことである。

#### 【学んだこと】

○堀川小学校では、4本柱(朝活動、くらしの時間、授業、自主活動)をベースとして教育実践が行われている。授業では、ひとり学習と聞き合いによって、子どもたちが対話的に学ぶ中で、自己の見つめ直し、学びを深めていく事を中心に据えている。聞き合いは、グループ単位でない学級単位で行われている。くらしの時間での聞き合いが授業の聞き合いのベースになっている。毎回様々な手法を教師から提示するのではなく、学び方がシンプルなため子どもたちも聞き合うスタイルに1年生のころから慣れていて、聞き合うことをどう生み出すか、というよりは、聞き合う中で自己の学びがどう深まるかを教師は追究することができていると思う。長年一貫して研究のスタイルを貫いていることの意味があるし、教育の本質は年月を経ても大きく変わることはないということも示唆していると思う。

くらしづくりにはたらく教育活動(学校要覧より)~4本柱~

○場所と時間を決めて清掃活動をするのではなく、自ら選んで朝活動を決めている姿がある。やらなければいけないこと、キレイにしなくてはいけないこと、と縛りをつくるのではなく、子どもが自発的に自分の生活する場を整えるために働きかけることを学びの場としてとらえていると感じる。その活動で、子どものどんな育ちを願っているのかをいつも教師は問い直しながら教育実践をする必要を改めて感じた。

くらしの時間(4年1組 政二級)

○個の日常の一コマについて言葉を介して、集団で共有している。多くの言葉で語り、「おたずね」をするので、仲間同士がお互いのことをよく知っている。学級の仲間づくりに大変効果的な活動であると思う。

1時限の授業(4年1組 政二級)特別活動「堀川弁当づくり」(第一次, 3/3)

1日を通して聞き合う学習形態で過ごす子どもたちであった。毎日このような形ではないと思うが、学びの形やリズムが学級にあるのは、子どもたちが安心して学ぶ土台となると思う。

2時限の授業(4年1組 政二級) 社会科「佐伯宗義がのこしたもの」(第二次, 6/13)

子どもが友の話を聞いていて、納得できないことや疑問に思ったことは、つぶやいたり、質問をするために手を挙げたりする。1つの意見を素通りしないで、学級みんなで受け止め合っていることが伝わってくる学級である。伝え合うことのできる学級で大切な視点を与えていただいた。

友達の発言に対して、「Sさんも実際に利用するの?」と問い返した子どもがいた。自分はいないのに、した方が良く、という意見に対してしっかりと言及することができる子どもの聞き合いへの向き合い方が素晴らしいと思った。自分が納得するために問い返すことを学級の文化として根付いていることを強く感じる授業であった。